

経済価値ベースのソルベンシー規制

― 導入に向けた検討事項 ―

【第6回】様々なガバナンスモデル



有限責任あずさ監査法人
シニアマネジャー

島本 大輔

る事例も見られる。

3. モデルガバナンス

スの3種類の各ガバナンスモデル別に高度化に向けた論点の解説を行う。

2. リスクガバナンス

全8回のうち6回目に当たる今回は、経済価値ベースのソルベンシー規制(以下、「新規制」という)において求められるガバナンス態勢の個別論点について解説を行う。

1. はじめに

第5回で解説したとおり経済価値ベースのソルベンシー規制等に関する有識者会議報告書(以下、「報告書」という)では、ESRが規制として導入される場合にはその計算・検証に関するより高水準のガバナンスが必要になるとされている。新規制に向けたガバナンス態勢の高度化の検討にあたっては、同じく経済価値ベースの規制として導入されたソルベンシーIIにおける対応が参考になる。今回はリスクガバナンス、モデルガバナンス、データガバナ

ソルベンシーIIの下で保険数理機能に求められる役割を図表1に示す。

リスクガバナンスの要素は多岐にわたるが、その中でも今回は報告書の中で取り上げられている保険数理機能について解説する。

報告書では、保険負債の妥当性検証は保険数理機能の主要な役割の一つであるとされ、また、その権限と責任が適切に定められていることが重要とされている。これに加え、検証機能は独立性を有することやその責任を果たすために必要なリソース(人員・ITシステムなど)を有していることが必要とされている。

保険数理機能は日本では馴染みのない機能であるが、ICPでは保険会社が備えるべき機能とされており、ソルベンシーII

報告書では、保険会社各社があるべきリスク管理を考える中で、その特性や目的に応じ内部モデルを活用することには大きな意義があるとしており、①第1の柱において一定の要件の下で保険会社の内部モデルを用いた計算を認めること②第2の柱の中で、金融庁が保険会社の内部管理の実態を把握しつつその高度化を促していくことの二つが考えられるとされている。特に第1の柱において内部モデルの利用を承認する際の着眼点としては、①統計的品質テスト②内部モデルに係る独立した検証プロセス③経営における内部モデルの利用(ユーステスト)とガバナンスが挙げられている。

ソルベンシーIIにおいても第1の柱において保険会社の内部モデルによる計測が認められているが、その承認にあたっては、ユーステスト、統計的品質基準、カリブレーション基準等を満たす必要がある。ICSにおける内部モデルの受入条件

図表1 ソルベンシーIIにおける保険数理機能の役割

保険数理機能	
主な役割 ●1st Line ◇2nd Line	●技術的準備金の計算の調整 ●技術的準備金の計算に使用した方法論、モデルおよび前提条件が適切であることの確認 ●技術的準備金の計算に使用したデータの十分性および品質の評価 ●最良推計の実績との比較 ◇技術的準備金の計算の信頼性および妥当性に関する、行政および監督当局への報告 ◇データ品質が十分でない場合、技術的準備金の計算を監督 ◇引受方針全般についての意見 ◇再保険の取決めの妥当性についての意見 ◇リスク管理態勢の効果的な実施に寄与(特に、資本要件の算定に用いるリスクモデルとORSAの評価に関して)

出典:KPMG 作成

図表2 モデルガバナンスフレームワーク

モデルガバナンス	・シニアマネジメントによる監視 ・役割・責任の明確な定義 ・方針と規程		・独立したモデル検証 ・内部監査によるレビュー		
モデル開発	・強固なメソドロジー ・導入前のテスト ・ユーザー受入れテスト ・変更管理方針	モデル検証	・永続的な品質確保の取組み ・リスクベース、ビジネス志向 ・結論 & 影響	モデル使用	・内部統制 ・モデルの限界に対する認識 ・モデルによる結果の解釈 ・データ品質のモニタリング
コミュニケーション・レポート	・意思決定をサポートする経営への報告 ・モデルの弱点・限界に関するオープンで透明性のあるコミュニケーション			・主要ステークホルダー（ユーザー、検証者、開発者）間のコミュニケーション ・第三者にとって理解しやすいレポート	
フォローアップ	・モデルの弱点に対する継続的な改善 ・モデルの弱点に対する透明で追跡可能な管理 ・モデル使用の制限に関する順守			・十分な追加資本	

出典:KPMG 作成

図表3 データガバナンスのフレームワーク

【5. データ品質管理】

- ・データ品質管理のプロセス、水準の設定
- ・統制の網羅性とデータに関するモニタリングおよびダッシュボードの構築
- ・品質毀損時のエスカレーション等の明確化

【1. データ戦略】

- ・全社的（部門・地域横断的）なデータ戦略の策定
- ・KPI／KRI等をふまえた重要データ項目の特定
- ・データガバナンスに係る組織の定義
- ・データ品質・統制に係る基本方針決定

【2. 組織体制・役割・責任】

- ・データガバナンス組織の確立
- ・3 Lines of Defenseの整備
- ・日々の業務への組み込み
- ・権限移譲とそれに基づく承認メカニズム

【4. 生成・加工・利用フロー】

- ・データが存在する領域・フローの全社的な把握
- ・辞書ツールを活用したデータ資産の文書化・管理
- ・データ生成から利活用・報告までのプロセス、システム、統制のフローの見える化

【3. データ定義／要件】

- ・データに係る共通言語の作成
- ・データディクショナリを活用した文書化・管理
- ・ビジネス上の定義やデータ要件の整備
- ・一部重要データの集中管理

出典:KPMG 作成

5. まとめ

6回目の今回は、新規制において求められるガバナンス態勢の個別論点について解説を行った。

新規制においては従来にはなかった保険数理機能といった役割や、モデルガバナンス、データガバナンスといった先進的かつ高水準なガバナンスが要求される可能性もあり、各社においては2022年の新規制の仕様暫定決定を待たず早い段階から態勢整備の検討を進めることが望まれる。

次回、新規制の導入時に保険会社に求められる内部モデルや保険負債に対する検証業務に関する

4. データガバナンス

報告書ではデータ品質に関する記述はあるものの、データガバナンスについては触れられていない。一方、2019年3月に金融庁より公表された「諸外国における保険会社の内部モデルの実態等に関する調査」で

もソルベンシーIIの基準と概ね対応したものとなっている。

欧州の先進保険会社では内部モデルを適用する独立した検証プロセス③経営における内部モデルの利用(ユーステスト)とガバナンスが挙げられている。

る態勢について、責任準備金監査等の検証業務の経験をふまえて、解説を行う。

(なお、本稿内容については20年9月末時点での調査情報に基づいていることにご留意いただきたい)

◇

【島本大輔(しまもと だいすけ)氏のプロフィール】日本アクチュアリー会正会員、CERA、日本証券アナリスト協会認定アナリスト。2012年KPMG(あずさ監査法人)入所。大手損害保険会社の保険数理部門・商品開発部門で経済価値ベースのソルベンシー規制対応(フィールドテスト)などを担当。あずさ監査法人移籍後は、国内外の保険会社・公的金融機関に対する責任準備金の監査業務に従事するほか、リスク管理・規制対応・IFRSコンプライエンス・M&A・保険計理人等のアドバイザー業務等を担当。

【著書など】「図解&徹底分析 IFRS『新保険契約』」(中央経済社、共著)、「保険業の会計実務」(中央経済社、共著)

【講演など】KPMG保険セミナー、セミナーインフォ保険フォーラム、日本アクチュアリー会年次大会など。

【専門分野】保険数理、保険規制、IFRS 17、ERMなど。